石川県立美術館だより

平成16年3月1日発行　第245号

特 集
ガラスの美

3月6日(土)～3月27日(土)会期中無休
午前9時30分～午後5時(入館は午後4時30分まで)

シュバルツロット人物文ワイングラス

エナメル彩水注

目 次

能面と能装束(前田育徳会展示室)…… 2
能面と能装束(第2展示室) ……2
ガラスの美 ……3
常設展示室　主な展示作品 ……3
美術館小史・余話(42) ……4
企画展TOPIC、各地の展覧会 ……4
講演会記録(畠山記念館名品展) ……5
企画展示室、次回の展覧会他 ……6
展覧会回顧、3月の行事案内 ……7
所蔵品紹介、新年度友の会会員募集 ……8

URL　http://www.ishibi.pref.ishikawa.jp/

常設展示室（前田育徳会展示室）
特　集
能面と能装束
3月6日（土）～27日（土）

恒例の、前田家伝来の能面と能装束を特集します。

加賀藩では、藩祖前田利家以来、歴代藩主たちが能を愛好しました。利家が殊の外、能を深くたしなむようになったのは、加賀金沢の城主となり、豊臣秀吉の側近となった頃からで、秀吉の能好きに刺激されたためといわれます。利家は「槍の又左」といわれるようにその武勇が信長に認められたのですが、一方「かぶきもの」と言われるだけあって、武勇一辺倒ではない、しゃれものの一面をも合わせ持っていました。そのような利家が能に惹かれ、またその才能に恵まれていたことは当然ともいえましょう。

能楽は古くは猿楽と呼ばれ、室町時代に世阿弥によって幽玄能が大成されました。同じように、茶道、華道、香道など日本独自の芸道もこの時代に成立しています。そこに日本人は深い精神性を求めたのです。能は人間の生死を非常に簡潔な形で表現しますが、その事によって、人間の本質をより純粋に伝える手段となっています。それを直接的に視覚に訴えるものが、能面であり能装束です。

今回展示する「花色地色絵花唐船模様縫箔」は、昨年の復元制作に際し、専門家による材質や彩色などの調査が行われました。この装束は、縹色（薄い藍色）地に牡丹・菊・梅などを満載した大小多数の唐船を全体に配し、波文には金摺箔と泥描を併用しています。花唐船は現在は金茶色・白・黒を主彩色に、補助色を加えた、落ち着いた彩りです。今回の復元調査で、当初は「紅入り」であり、彩色は十三色に及び、金糸の使用も確認されました。いわゆる赤色の退色が著しかったということです。当初の作品をイメージすれば、目を見張るような華やかなものであったことは言うまでもありません。それは、近世初頭の南蛮船の渡来による海外への関心が高まっていた世相を、如実に反映しているといえましょう。

面（おもて）は元来、神事において神や鬼神など、非人間を表現するために造られたものです。特に、神を表現する面は、演者がそれをつけることによって神格化されるとされ、面は信仰の対象でもありました。その古面の形態を残す翁面において、「海より流れついた」「つけると雨が降る」などの伝承が伴うことは、その名残とも言えましょう。

室町時代の世阿弥は、能面の種類について「年寄りたるぜう、悪ぜう、笑いぜう、顔細きぜう、男、若男、女、ちと年寄りしくある女」と述べています。「ぜう」とは老人を意味しますが、翁・鬼神に加え、男女の区別や年齢を区別するために幾種かの面が使い分けられていたことがわかります。

それ以降、観世・金春・宝生・金剛の四座の分化と普及に伴って、面の種類も増え、限られた能曲のみに用いる専用面や、その流派固有の女面などが造られるようになります。桃山時代には約六十種、江戸時代の能楽の式楽化に伴って更にそれは増え、現在、その数は二百種類を超えるとされています。

面の作者・面打師は、中世以降、出目家をはじめ、越前国より多く出ていることが注目できます。この背景には、白山信仰の広まりによる白山猿楽の盛行があり、白山信仰圏である石川・福井・岐阜の神社には、現在も多くの面が伝えられています。当地において、能楽が盛んとされる根底には、このような流れがあるのです。

本館所蔵の能面は、加賀藩前田家に伝来したものです。前田家は二代藩主利長が、白山猿楽の流れを汲む大野湊神社の神事能を復活させたのをはじめ、五代綱紀の時代に宝生流を採用するなど、歴代藩主が能を愛好しました。特に、十二代斉広・十三代斉泰の時代のそれは顕著で、斉泰は維新後の「能楽」復興に尽力したことでも知られます。

金沢で宝生流の能が盛んであることを指して「加賀宝生」なる呼称もあります。本特集では、本館が所蔵する能面十面と能装束七領を紹介し、前田家の能楽史の一端を紹介します。

能面「般若」

桃色地山道文摺箔

常設展示室（第2展示室）
特　集
能面と能装束
3月6日（土）～27日（土）

常設展示室(第5展示室)
特　集
ガラスの美
3月6日(土)～27日(土)

テーブルガラスセット

人類とガラスの結びつきは古く、紀元前一五〇〇年頃にはエジプトや西アジア地方でガラス器が生産されていたようです。用途も単に食器のみならず、装飾品の比重が高いことも大きな特徴です。その後ガラスの生産はローマ帝国の繁栄と滅亡、新興イスラム勢力と西欧世界との抗争、ルネサンス、ナポレオンの登場など歴史の大きな変革の影響を強く受けてきました。

また今日一般的な透明ガラスをはじめ、装飾性への要求は様々な技術革新をもたらし、カットや金箔の使用など世界各地で特徴のあるガラスが生産されてゆきました。

それでは、今回の特集のタイトルとなっている「ガラスの美」とは何なのでしょうか。まず、宝石のような華麗な輝き、何世紀を経ても色褪せない安定した堅牢性を挙げることができます。装身具にガラスが用いられてきたのは、こうした永遠性への志向とも密接な関係があると考えられます。

しかしその一方で人々は薄く、繊細なガラス器の生産にも意欲を注いできました。一瞬の衝撃で、はかなく崩れ去るガラスは人生を投影するものということができます。『旧約聖書』の「コヘレトの言葉」には有名な〝空の空なるかな〟のくだりがありますが、空しさ、はかなさへの想いは古今東西共通するものと言うことができます。それゆえ、ガラスの造形に託されてきた想いの基底にも同じような思想があったと考えることができます。今回は主に十六世紀から二十世紀にかけてヨーロッパで制作されたものを展示します。

主な展示作品

レース・グラス蓋付大杯　ヴェネツィア
ゴールドサンドイッチグラス草花文杯　ボヘミア
シュバルツロット動物文杯　ボヘミア
グラヴィール葡萄文把手付瓶　オランダ

常設展示室
主な展示作品
3月6日(土)～27日(土)

◉＝国宝　◎＝重要文化財　○＝重要美術品
□＝石川県指定文化財

前田育徳会展示室
特集　能面と能装束
小面　蝶蒔絵面箱
花色地色絵花唐船模様縫箔

第1展示室
◉色絵雉香炉　野々村仁清
◎色絵雌雉香炉　野々村仁清

第2展示室（古美術）
○□色絵布袋図平鉢　古九谷
青手桜花散文平鉢　古九谷

特集　能面と能装束
翁　伝三光坊
色変鶴菱文唐織
鶸茶地型紙花散紋縫箔

第3・4展示室（油彩画・版画・彫塑）
油彩画
1982年　私　鴨居　玲
鬼の左手　庄田常章
鼓　宮本三郎

版画
プッペ　田村孝之介
花帽子の少女　吉田冨士夫

彫塑
スパイラル84'　木戸　修
Miserere VI　中村晋也

第5展示室（工芸）
特集　ガラスの美
※上段をご覧下さい。

第6展示室（日本画）
天女衰相　岡本秋石
春を待つ　滝川真人
四季花鳥図　広田百豊

◆観覧料

個人	一般	350円
	大学生	280円
	高校生以下は	無料
団体（20名以上）	一般	280円
	大学生	220円
	高校生以下は	無料

鼓　宮本三郎

天女衰相　岡本秋石

企画展TOPIC

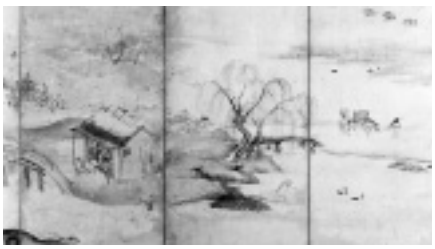
「日本の四季－春・夏の風物－」前編

わが国は、国土が南北に長く、四方を海に囲まれた狭い島国ですが、多様な自然環境を形成し、春・夏・秋・冬の四季の変化がはっきりしています。日本人は、この四季のはっきりした自然に対して協調的であり、自然と共生するという態度で生活し、文化を築き上げてきました。そして、自然への感情を「花鳥風月」、「雪月花」というような言葉で呼び、賞賛してきましたし、日本人が自然との間で織りなす美意識を表現した美術工芸品が作られてきました。

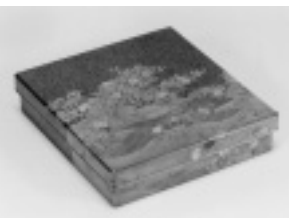
本展覧会は、桃山時代、江戸時代の絵画と工芸品の中から、山水花鳥や花木草花を主題とする作品とともに、春・夏の季節の情趣をよく表す事物を取り上げた作品、季節感を感じさせる人々のくらしを取り上げた作品約100点を展示し、日本美術の特色の一つといえる自然に対する優しい情感をたたえる作品を鑑賞してもらうものです。

これまでは考えられなかったような暗いニュースが伝えられる世相の中で、自然に対しても人に対しても慈しみ、育て、共生してきた日本人の持つ優しさを取り戻すための一つの機会となればと願って開催するものです。

展示する作品を少し紹介しますと、季節の花木草花を取り上げたものとしては、紅白梅図屏風、藤棚図屏風、朝顔図屏風、芥子図屏風、四季草花図屏風のうち春夏、歌川広重の大判錦絵・堀切の花菖蒲、重文・梅花図画稿（尾形光琳）、重文・色絵梅花図平水指（野々村仁清）、古九谷色絵牡丹文平鉢、古九谷青手罌粟図平鉢、若杉窯色絵唐獅子牡丹図平鉢、吉田屋窯色絵百合図平鉢、染付銹絵杜若図茶碗（尾形乾山）、鉄線蒔絵提箪笥、蒔絵枝垂桜柳文棗（嵯峨棗）、重文・緑地桐鳳凰文唐織、茶地野花模様唐織、朝顔図鐙など。季節感を感じさせる人々のくらしを取り上げた作品としては、重文・洛中洛外図屏風、重文・四季耕作図屏風（久隅守景）、蹴鞠図屏風、雨宿り図屏風、観桜遊楽図屏風、北野社頭阿国歌舞伎図屏風、宇治川群螢蒔絵文台、蒔絵船遊び図印籠などで、絵画と工芸各分野の作品をとりまぜた展示となります。　（南　俊英　学芸第一課長）



四季耕作図屏風（部分）



蒔絵春秋花卉図硯箱

染付銹絵杜若図茶碗

※「日本の四季－春・夏の風物」の会期は
4月24日（土）～5月16日（日）です。

美術館小史・余話 42 嶋崎　丞（すすむ）（当館館長）

石川県立美術館の開館

美術館の基本設計を担当した富家建築事務所を中心とする現場担当の方々と議論を重ねながら工事は順調に進行し、昭和57年12月には美術館の本体がほぼ完成した。開館予定の58年11月までには1年足らずの日数ではあったが、本体を乾燥させるためにそれなりの期日を確保することが出来てほっとした。それでも指定文化財を公開するにはまだ日数が足りないとして、文化庁から厳しい指導があり、展示室と収蔵庫全部に除湿器を入れ、10ヶ月に渡って空調の24時間運転を実施した。周辺部の外溝や庭園の工事は、極端な言い方をすれば開館の直前まで工事を実施してもさほど問題が生じない（事実一部はそうであった）が、貴重な文化財や美術品を収蔵展示する美術館は、一般の建築物とは異なった濃（こま）やかな配慮が必要であるということである。

建築工事の完成と同時に、開館記念をどのような展観で飾るかが大きな課題であった。日本の美術を長年とりあげて優れた実績をあげてきた当館としては、新美術館の開館に当たっても日本美術の特質である「花鳥風月」をそのままの展覧会名称とし、古典と現代の名作を通して花鳥風月の心を明らかにしようという意図で企画開催し、開館を飾るにふさわしい豪華な内容であった。常設展示部門では、前田育徳会展示室で育徳会の名宝を久方振りで公開し、第1から第6の展示室では旧館以来の収蔵品に、開館に向けて収集してきた近現代の石川県ゆかりの代表作品を加えて展示した。開館式に招待された県内外の著名人約500名の人々からは大きな感嘆の声があがった。祝辞を読まれた洋画家故高光一也氏は、感極まって声が出ず、涙を流された情景は今も記憶に新しい。

※「美術館小史・余話」はこの号をもちまして連載を終了いたします。

各地の展覧会……3月

※開催日程、休館日、内容等は直接各館へお問い合わせ下さい。

シャガール傑作版画展　3／21まで
名古屋市美術館（名古屋市・052-212-0001）

県民の美の財産　3／21まで
新潟県立近代美術館（長岡市・0258-28-4111）

現代の水墨画2004　3／21まで
富山県水墨美術館（富山市・076-431-3719）

神と人とファラオ　古代エジプトの美　4／4まで
三重県立美術館（津市・059-227-2100）

彫刻家　堀内正和の世界展　3／13～4／18
京都国立近代美術館（京都市・075-761-4111）

講演会記録

畠山即翁の茶器蒐集と茶話

講師：武内範男氏（畠山記念館主任学芸員）

開館20周年、おめでとうございます。この佳節に畠山即翁のコレクションを公開できますことは、大変有難いことと思っております。今回、私が畠山記念館の創立者畠山即翁およびそのコレクションについて話すということが適切かどうかよくわかりませんが、奉職している者としては、語らなければならないという運命になっているわけでございます。

私自身、生前の即翁に会うことは叶いませんでしたが、自分たちの職業、学芸員という職業なのですけれど、「創立者と出会う」ということは、なかなか難しいことです。でも、一度くらいは「会っておく」ということは必要でないのかな、という気もいたします。やはり「ちょっと顔だけでも見ている」というのと、「全然見ていない」というのと、意味が違うと思います。特に私立の美術館で仕事に携わるという者にとって、「会っていない」というのは、非常に悲しいことのように思います。それは仕方がないことではあるのですけれど。

茶道具というのは、その人から見る茶道具、また茶道具からその人がうかがえる、ということになると思います。単に美術品・工芸品だとかいう解釈の仕方もありましょうが、やはりそこに人を生み、人格を生んだ、気持ちとか感情というものでその作品を見るということが、茶の湯の美術の鑑賞の仕方ではないか、即翁の収集した茶道具というのも、そういう眼から見るべき茶道具ではないか、という気がいたします。

近代の茶人、数寄者と呼ばれる人たちは、お茶を嗜み、実際に楽しむために、茶道具を集めました。数寄者というのは、明治以降の政財界の人たちや裕福な人たちが古美術品を収集し、それでお茶を楽しむ趣味的な色合いの強い人たちをいいます。数寄という心理には、「好きである」「好きで好きでたまらない」という一種のものに対する執着心だとか、愛物だとか僻愛だとか、そういう要素があるわけです。そういう収集品が、今日では美術館となって公開されているのです。ですから、個人の収集した美術品が、個人から離れて、社会にも還元している、ということにもなります。考えてみれば、今回出品したような茶道具は、50年前には、簡単に見られるようなものではありませんでした。私もこんな職業をしているから、手の届かないような品物であっても、見たり触ったりすることができますが、戦前ならなおさらそんなことはできないでしょう。やはり美術品や茶道具というものが「解放」されたということにつながるのではないか、と思います。

即翁さんという方は、金沢という歴史的な土地に生まれ育ちました。そして、大正4、5年頃からものを収集しております。『雅楽帖』というのがありまして、これが蔵帳なのですけれども、それをこの頃から書き始めています。最初に何を集められたか、といいますと、古九谷ですよね。やはり郷土といいますか、古九谷を集められました。その後は、社会の変革に伴って名家の人たちがどんどん品物を売りに出した、いわゆる売立によります。大正12年には横山男爵家の、14年には井上世外（馨）の、そういうものを手に入れました。今回展示しました伝趙昌の「篠虫図」や「西湖図」がそうです。

どうして茶に接近するかといいますと、明治以降の新興の事業家・政治家の人たちが茶を嗜んだのですが、明治の最初の人たちは、はじめは煎茶だったのですが、だんだん抹茶になりました。やがて社交としての茶が必要になり、加えて美術品の保護にもつながるという流れもあって、そういう人たちのひとつの嗜みというものが、茶の湯であったというわけです。そしてどんどん茶道具をお集めになっていくわけです。

そして、即翁にとって、それに拍車をかけたのが、やはり近代最大の数寄者である益田鈍翁という人との出会いであるわけですね。鈍翁との出会いが茶の出発点であり、その後裏千家の淡々斎に習います。鈍翁の影響は、お茶ということもありますが、事業の面での先達でもありまして、両面から尊敬し、本当に慕っていたようであります。

昭和11年に毘沙門堂という銘を持つ「柿の蔕茶碗」を購入いたしました。値段を申しますと、昭和11年で5万5千円。あんまりお金のことを言ったらいけないかもしれませんけど。その時の1万円とは、すごいお値段で、公務員の給料が40円か50円だったらいい方、3,000円で大きな家が、5,000円持てば大金持ちです。値段というのは、下賤なことかもしれませんけど、ものの比較には大変ありがたいことです。ちなみに申しますと、茶道具というのは、いつの時代も高いものなのです。やはり、いいものは高い。茶道具は、由緒来歴を誇るわけであります。きちんとしたものは、しかるべきところからしかるべきところへ行って伝わってきています。値打ちや由緒を買うといってもいいでしょうね。持った方は持った方で、やはり自分が持つ前は誰、その前は誰が持ったという、その延長上に自分があるのだと。だからこそ、大切にしなくてはいけないし、万金をかける値打ちがあるということを自覚してお買いになっています。「即翁さんは立派だなぁ」と僕が思うところは、そんなところであります。それはとりもなおさず、自分は能登の国司の子孫であるというとか、そんな意識を自負心として持っていたのではないかと僕は思うのです。

（「開館20周年記念　畠山記念館名品展　－茶道美術を中心に－」にちなんで、昨年10月5日に当館ホールで行われた講演内容を、当館の責任で要約したものです。）

企画展示室

第22回石川県写真家協会展

3月6日(土)～10日(水)(第7展示室)

22回展はテーマを「リセット」といたしました。「原点に戻る」「やり直しをする」というような意味があります。協会員はそれぞれ、志した写真の原点に戻り、改めて自己の目指す写真の道を模索すると思います。模索した結果、確信をもって、昨日までの延長線を歩く人、新しい道に歩をすすめる人、各自の心のありようを、写真を通して表現します。

◇入場無料

◇連 絡 先　金沢市尾張町1-7-8　近岡房治
☎076-264-3288

第26回一創会展金沢展

3月6日(土)～10日(水)(第8・9展示室)

新春、東京都美術館にて開催された本展の中から、基本作品、受賞作品及び石川県内作家の力作約120点を選び、金沢での記念巡回展を開催いたします。

何ものにも制約されない自由な作品群をご鑑賞下さい。

◇主な出品作家
横塚　繁　今村昭寛　真辺啓介　寺西武久
西山英二　増田眞人　蓮井廣幸　梅沢曜行
虎井　修　松本陽子

◇入場料　一般 500円　大高生 400円
中学生以下無料(団体は各100円引)
※当館友の会会員は、会員証提示により
団体料金になります。

◇連絡先　小松市二ツ梨町ク-19-15　寺西武久
☎0761-44-4235

'03玄土社書展

3月13日(土)～15日(月)(第8・9展示室)

玄土社の'03年の歩みをまとめた創作(前衛抽象)46点、臨摹(りんも)(古典)25点を展示いたします。創作は自由奔放にチャレンジ精神で。臨摹はあくまでも古典に忠実に。この基本姿勢に揺るぎはありません。自己開放と緊張感を愉しみながら活動を続ける玄土社です。玄土社ならではの書の世界へお誘いいたします。

トークタイムは、'03年書壇で衝撃的な話題となった“墨”誌連載の表立雲の論考「北魏光州青州の摩崖刻石の書者は鄭道昭ではなかった」をテーマとして初心者にもわかりやすく興味深い内容です。

ご来場をお待ちしています。

会期中の行事　「表立雲トークタイム」
日時・会場　3月14日(日)午後2時～　講義室
◇入場無料
◇連 絡 先　金沢市本多町1-7-15
玄土社主宰：表立雲　理事長：松村知春
☎076-263-0122

第27回伝統九谷焼工芸展

3月13日(土)～26日(金)(第7展示室)

昭和51年に郷土が誇る九谷焼の技術保存と発展向上を図るため、九谷焼技術保存会が石川県無形文化財として指定されましたが、本展はその技術保存会の事業の一つとして毎年行われている公募展で、今回は27回目です。入選作並びに九谷焼技術保存会会員の作品を一堂のもとに展示します。

◇入場料　一　般 350円　大高生 300円
中小生 250円　(団体は各50円引)
※当館友の会会員は、会員証提示により
団体料金になります。

◇連絡先　能美郡寺井町寺井ヨ25　石川県九谷会館
☎0761-57-0125

第28回日本海造型展

3月18日(木)～23日(火)(第8・9展示室)

日本海造型会議の19名が、自己表現の可能性を追求し、絵画、彫刻、デザイン、映像、建築、書、造形、漆、陶、ファイバー等の意欲作を発表します。既成のジャンルを超え、交流する中で、新しい北陸の文化の醸成に努めようとするものです。今回はテーマを「遥」とし、一室触れることの出来る作品もあります。

◇入場料　一般 600円　大高生 400円　中小生 200円
(前売り料金は各100円引き)
※当館友の会会員は、会員証提示により
前売り料金になります。

◇連絡先　金沢市山科1丁目14-40　三井泰子
☎076-241-2779

美術館の本

石川県立美術館所蔵品図録	3,500
九谷焼	2,000
鴨居玲	3,000
板谷波山の神々しき陶磁世界	1,900
北野恒富展	2,000
畠山記念館名品展	2,200

税込定価(円)

☆ミュージアムショップで販売中!!
郵送ご希望の方は当館へ電話でお問い合わせ下さい。
☎076－231－7580

次回の展覧会

特　集　春の優品選(前期)
(前田育徳会・第2展示室)
4月1日(木)～18日(日)

特　集　第60回現代美術展　(第3～9展示室)
4月3日(土)～18日(日)

展覧会回顧

平成15年度開催の展覧会（1）

開館20周年を迎えた今年度も当館では、1階の企画展示室や2階の常設展示室で数多くの展覧会が開催されました。

企画展示室では、当館主催の**「北野恒富展－金沢が生んだ美人画の巨匠－」**、**「畠山記念館名品展－茶道美術を中心に－」**、**「北陸の人間国宝展」**や、**「北京故宮博物院展」**、**「ミレー、コロー　バルビゾンの巨星たち展」**、**「いわさき　ちひろ展～あたたかい心の色にふれる～」**などの報道機関主催の企画展、また各種美術団体の公募展や巡回展というように、今後3月末までに開催予定のものを含めまして29回を数えます。常設展示室で行った特別陳列や特集は28回となり、1階と2階を合計すると57回という多くを数えます。それらの中からいくつかの展覧会を振り返ってみたいと思います。

「北野恒富展－金沢が生んだ美人画の巨匠－」は、サブタイトルにあるとおり明治13年に金沢で生まれ、大阪で活躍した日本画家・北野恒富の初めての回顧展でした。石川県ゆかりの作家ということで、当館では作品収蔵作家として収蔵し、常設展示室で紹介していますが、収蔵作品が少なく、回顧展が開かれなかったこともあり、こういうすばらしいゆかりの人がいたのかという感想がありました。また、明治・大正・昭和3代にわたる大阪を中心とする生活・風俗を取り上げた作品が多いこともあり、美人画というよりも風俗画という側面もあり、女性客からは、衣装なども含め、非常に懐かしいという声が聞かれました。

鷺娘　北野恒富

「北京故宮博物院展」は、平成5年に開催されて以来10年ぶりの北京故宮博物院展でした。北京故宮博物院の特別な協力により、収蔵する宝物より110件（140点）が展示されました。中国最後の王朝である清の歴代皇帝の肖像画や甲冑、衣装など皇帝・皇后ゆかりの品々を紹介する【清王朝の栄華と清代宮廷芸術】、良渚文化、龍山文化などの新石器時代の遺物から、商・西周・春秋戦国時代・漢などの古代王朝の遺品、それから唐時代に至るまでの青銅器・玉器・陶磁器・金工品・漆工品を紹介する【故宮に見る中国五千年の歴史】、宋・元・明・清時代の陶磁器・漆工品を紹介する【故宮が伝承した中国の名品】の3つのテーマで構成した展示でした。多数の入場者で賑わい、中国文物に対する関心の高さが再認識させられました。

「ミレー、コロー　バルビゾンの巨星たち展」は、国内の個人収集家のコレクションによる、ミレー・コローの作品を中心にバルビゾン派の31作家・103点の展示でした。パリ郊外のバルビゾン村に住み、付近の美しい自然や、農民たちの日々の営み・生活を真摯で温かいまなざしで表現した作品群は、もともと日本人には好まれてきましたが、自然への回帰が求められる今日、改めて共感を呼び多数の入場者で賑わいました。

「いわさきちひろ展～あたたかい心の色にふれる～」は、子供を描く画家・絵本作家いわさきちひろの原画・絵本・遺品を東京と安曇野の両美術館の収蔵品で紹介するものでした。可愛く・愛くるしい子供とともに、ちひろの一生のそのときそのときを反映する様々な思いを込めた子供たちに対して、年配の来場者からは、自分の一生と重ねた感想が聞かれました。また、子供連れのお母さんやご夫婦は、作品を指さしながら子供さんに話しかける風景がよく見られるなど、女性を中心に会場全体が和やかな雰囲気に包まれました。

（南　俊英　学芸第一課長）

3月の行事案内　《入場無料・いずれも午後1時30分から行います》

月　日	行　事	内　　容	会　場
3／6（土）	**土　曜　講　座**	「能面」鑑賞の基礎講座　（村上尚子　学芸員）	講義室
3／7（日）	**CDコンサート**	20世紀の名指揮者　サー・ゲオルグ・ショルティ マーラー　交響曲第1番「巨人」（約60分）　演奏　シカゴ交響楽団	ホール
3／13（土）	**土　曜　講　座**	水彩画の美5　（西田孝司　学芸主査）	講義室
3／14（日）	**月 例 映 画 会**	民芸陶器　－浜田庄司－（25分） 茶の湯釜　－長野垤志－（25分）	ホール
3／21（日）	**月 例 映 画 会**	神々の器　壺屋の陶器　－金城次郎－（25分） 日本刀　－宮入昭平－（25分）	ホール

※3月の全館休館日は4日（木）、5日（金）、28日（日）～31日（水）です。

所蔵品紹介 141

桃鶏図（とうけいず）

鈴木華邨（すずきかそん） 安政7年(1860)～大正8年(1919)

明治～大正

縦145.0　横56.5(cm)

淡紅色の花をつけた桃の木の下に、雛を見守る親鶏の姿が見られます。画面は、桃の花の馥郁（ふくいく）とした香りに満ち、早春の穏やかな気分が漂っているようです。

空の部分に淡く金泥を刷き、桃の木は堅い線描を主体に、鶏は没骨風にやわらかく彩色されています。また、桃の花や蕾、木の枝や幹、鶏の羽毛、地面の草など、ひとつひとつの景物が細密に描き込まれており、写実的でありながら、縦長の平面の中にモティーフをバランスよく組み合わせる装飾的な構成がうかがえます。さらに、Z形の枝の流れを繰り返すように、雄鶏の尾羽から首、雌鶏の顔から右の雛へという構成を取り、画面に変化と動きを与えているのがわかります。

桃は、結婚や安産の瑞祥とされ、その実は妊婦がつわりをいやすために食べたともいわれています。また古くは、この実を食べた結果、懐妊すると考えられ、出生の象徴とされました。その桃の木と、雛を見守る親鶏の姿を組み合わせることで、親子のうるわしい愛情を表現しようとしたのでしょう。

鈴木華邨は、加賀藩前田家の呉服用達の商家の子として江戸で生まれました。絵を、狩野派を基礎として、土佐派、円山四条派、浮世絵さらに西洋画など諸派を学んだ菊池容斎に学んでいます。明治10年第1回内国勧業博覧会で受賞したほか、各種博覧会や共進会で受賞を重ね、日本画会や日本美術協会など美術団体にも多数参加し活躍しました。一方、当県とのゆかりも深く、22年に石川県工業学校の教諭となり、26年まで絵画や図案意匠を指導しています。とりわけ季節感を生かした花鳥画の表現に秀で、また陶磁器、銅器、漆器などの図案にも才能を発揮しました。

※第6展示室で展示中

3月1日(月)より受付開始！！

新年度友の会会員募集

◎募集定員　1,500名
◎年 会 費　2,000円
◎受付場所　当館図書閲覧室
◎受付時間　休館日は除く午前9時30分～午後4時30分
◎郵便でのお申し込みについて
①ご希望の方は郵便振替をご利用下さい。
②詳細は『美術館だより』第244号をご覧下さい。
③会員証は『美術館だより』と一緒に、3月末頃からお送りいたします。
④郵便振替口座　00700-7-46490
加入者名　石川県立美術館友の会

会員の特典

★当館の企画展・常設展入場券の配布
★当館企画展の開会式にご招待
★当館主催展覧会入場料の割引
★当館主催諸行事への参加
★『石川県立美術館だより』を毎月郵送

お問い合わせは当館普及課友の会係まで　☎076-231-7580

新年度会員証（見本）
七人猩々図　狩野常信　江戸時代

休館日：3月4日(木)･5日(金)、28日(日)～31日(水)

石川県立美術館だより　第245号
2004年3月1日発行
〒920-0963　金沢市出羽町2番1号
TEL 076(231)7580　FAX 076(224)9550
URL http://www.ishibi.pref.ishikawa.jp/